

1 全体計画

学校の教育目標

- 自ら進んで考える子
- 思いやりをはぐくみ、行動できる子
- 心や体の健康を大切にする子

平成29年度学校経営方針

児童に「自律する力」「協働する力」「参画する力」を付けさせる。このために、白桜アクションプラン29に基づき、児童の自己決定、自己責任を主体とし、それができる場の設定（豊かなかかわり、振り返り）を工夫した学級経営を推進する。

本校の捉える「確かな学力」

- ・基礎的・基本的な事項を確実に身に付ける。
- ・児童が自分の考えをもち、それを他者の考えと照らし合わせ、協働しながら工夫することで、さらによりよい思考や判断、表現となるようにする。

【指導の重点】

- ・子供の「自律する力」を育成するため、各教科等の学習において「思考力・判断力・表現力」の育成に重きを置く。特に、子供一人一人が学習対象と深くかかわりながら、自分の考えをもつ機会、選択をした成果を振り返る場面を設ける。
- ・子供の「協働する力」を伸ばすために、友達との交流し考えを照らし合わせながら、考えを広げたり深めたりする活動を重視する。また地域の方々や先哲の考え方に触れ合い、そこから実社会の中で課題を解決したり、ともに力を合わせようとしたりする姿を学ぼうとさせる。
- ・子供の「参画する力」を育成するために、社会や集団の立場に立つてものごとを考える機会を設け、公民的な資質を伸ばすほか、多様な価値観や文化的な背景を大切にする姿勢を養わせる。

授業改善の視点

指導内容・指導方法の工夫 ○算数少人数指導、TT指導を主に個に応じた授業展開 ○身近な事象や問題をもとに考えるなど学習意欲につながる授業改善○ICT機器の活用と体験学習、問題解決学習の充実	教育課程編成上の工夫 ○基礎・基本の学力の定着と言語活動の充実 ○心の教育の充実のために、読書指導、感想文指導の充実 ○校外学習の充実と体験的・実践的な学習が工夫できる編成	へ評価の工夫 ○個別の具体的な評価場面の多様化と評価と指導の一体化 ○学力・体力調査を生かした指導法の工夫と評価への反映 ○特別な支援が必要な児童への配慮と学習指導評価の工夫	校内研究・研修の工夫 ○主体的・対話的に学ばせる授業の改善 ○外国語の指導を重点にし、英語に慣れ親しませる指導法や教材の工夫 ○教師の授業力向上を図る組織の確立	家庭・地域との連携の工夫 ○家庭・地域の人材など、地域の教育力の活用 ○地域を素材とする学習を通して地域の一員である自覚をもたせる学習の設定 ○家庭学習の習慣化と学習規律の確立
--	---	--	---	---

## 2 各教科における授業改善プラン

### (1) 国語科

#### 国語科の重点

- ・児童が学習した漢字を書けるように、繰り返し練習させ定着を図る。
- ・読書活動を充実させる。4年生以上はページ数を記録。
- ・児童に読解力や書く力をつけるために、キーワードや要旨をおさえる指導を工夫する。
- ・言語活動を高め、語彙を増やすため、国語辞典を活用させる。
- ・日常的にスピーチ活動を導入し、聞く話す力を身に付けさせる。

現状分析（成果と課題）		授業改善プラン	
分析内容		指導上の課題	改善案
1年	読書が好きな児童が多いが、読まない児童は、図書の時間に借りたものも読まずに返している。人に対して話すことに意欲的だが、人前での発表になると自分の思いをうまく表現できない時がある。書くことにはまだ慣れておらず、特に促音が抜けてしまうことが多い。また、助詞の使い方にまだ慣れていない。	話したり書いたりする時に、話型を示して指導すれば、自分の考えを伝えることができる。しかし、自分の言葉で表現するとなると難しい児童も多く、個別指導が必要である。文を書く時には、促音が入っていないことがある。また、助詞「は」「を」「へ」を使い分けることが、まだ、うまくできない。	定型文などのモデル文を基にして、児童が自分なりの表現ができるように指導する。書くときには、声に出しながら、促音を意識して書かせていく。個別支援が必要な児童に対しては、机間指導の中でヒントを与えたり、書きたいことを一緒に考えたりすることで、書くことに安心して取り組めるよう指導する。助詞についても、音読や文章を書く中で折を見て指導し、定着を図る。
2年	読書が好きな児童が多く、特に読書句間や図書の時間には、進んで読書をしている。また、日直スピーチでは、友達に伝わるように理由を加えて発表し、質問をする児童も増えている。学力調査では、「読むこと」、「話すこと・聞くこと」「言語についての知識・理解・技能」は区平均を上回っている。一方で、「書くこと」は区平均を下回っている。自分の経験や想像したことを書くことや質問に正対した考えを明確に書くことが今後の課題である。	文章を書く前に、文章の書き方や例文、モデル文の提示等を行うことで、書く内容のイメージができ、多くの児童が理解し、積極的に書くことができる。一方で、授業終わりに書く振り返りや自分の考えを書く感想文に取り組むとなると、書ける児童はどんどん書いていくが、個別に支援が必要な児童も数名おり、個人差が大きい。書きはじめてつまづく児童もいる。また、句点を書くことが身につけていない児童もいる。	全体指導の中で、書くことに取り組みやすくするため、言葉の使用例や書き方等を示し、書く内容のイメージをもたせていく。また、モデル文を土台としながら、自分の考えを書くことができるように指導していく。さらに、誰かのために書くことや書いた文章を誰かに読んでもらうといったことで、書くことの目的意識を明確にし、必然性をもたせる。それが主体的に書くことへ繋がる。個別支援が必要な児童に対しては、机間指導の中で、ヒントを与えたり、自分で書けそうな文章量でよいことを伝えたりすることで、安心して文章を書けるよう指導していく。

3年	<p>作文に関しては無回答の児童が多く、調査の形式に慣れていなかったこと、時間配分ができなかった児童が多くいたことが原因であると予想される。</p> <p>また、新出漢字の習得、学習後の定着も今後の課題であると考えられる。</p>	<p>自ら文章を考えたり、考えや意見をまとめたりすることが苦手な児童が多い。</p> <p>また、新出漢字は習った時は書けるが、時間がたつと忘れてしまったり、文章中では使えていなかったりすることが多い。</p>	<p>文章を書くことについては、はじめ・中・終わりの文章構成を意識させ、段落ごとにまとまりのある文を書けるようにする。</p> <p>新出漢字は反復練習を繰り返すと共に、10問テスト、50問テストを行い、定着を図る。また、文章中にも習った漢字を使うよう指導する。</p>
4年	<p>文章量が増えたせいとか、区平均を全体的に下回った。書く能力において、漢字を書くことについては、平均程度の力がある。しかし、作文では、個人差が大きく、自分の言葉で書くことに対し苦手意識を強くもつ児童も多い。また、表と文章を関連付けて考えたり、そこから読み取った内容をまとめたりする力は課題がある。</p>	<p>作文は、個人差があり、提示された主題に沿った内容を考えるのが苦手な児童もいるため、段階を追って指導する必要がある。</p> <p>また、指定された条件に基づいて考えを記述する問題では、条件を失念してしまったり、条件を意識するあまり本来の問いとそれている考えを書いてしまったりする。</p>	<p>作文は、個人に応じて、自分が書く・書きたい主題を捉えて、文章の組み立て方を重視した指導をすることにより、自分の思いを伝えられる文章を書く機会を増やしていく。</p> <p>また、指定された条件に基づいて考えを記述することに特に課題があるため、記述する際の条件を明確にし、児童も構想表などを活用し、問われていることや条件を意識して考えをまとめていくよう指導をしていく。</p>
5年	<p>「話す・聞く」が大きく落ちている。また、「言語についての知識・理解・技能」についても値が低い。</p> <p>「読む」に関しては、70%を超えているが、昨年の5年生の値には及んでいない。全体的に国語の力が付いていないと考えられる。</p>	<p>国語に対する苦手意識をすでにもっている児童が多く見受けられる。国語への意欲の低下が最大の課題だと考える。</p> <p>そのため、スモールステップで達成感を数多くもたせることが意識改善の近道と考える。</p>	<p>漢字の10問テストと50問テストを合格するまで繰り返し行っているため、効果が今後表れると考える。</p> <p>日記を継続的に書いていくことで、「書くこと」に書き慣れ、構成などの技能も意識できるようになると考える。</p> <p>また教師がコメントの中で論理的な文章になるよう指導を入れる。</p> <p>また、発表する機会も数多く設けることで、「話す・聞く」にも慣れさせていく。</p>
6年	<p>中野区学力調査の結果から読む能力に関しては区、全国平均値より高い結果となった。昨年度日常的に行っていた新聞読み取りがようやく実を結んできたと考えられる。</p> <p>一方、話す聞く能力・書く能力が区、全国平均値よりやや低い結果となった。実際に日頃のテストの結果を見ても芳しくない。聞いた内容をどう整理し処理するかを苦手とする児童が多い。</p>	<p>読むことを苦手としない一方でまとめ方には課題がある。重要な部分はどこか、箇条書きでまとめるのか、文章に直すべきなのか自分で考え整理する能力がやや低い。</p> <p>また、自分の考えを表す場合も感情面から考え直接的に表現することに課題がある。根拠となる事例や比較対象などある程度の客観性や説得力をもたせる必要がある。</p>	<p>授業の際では、叙述を根拠として自分の考えが発表できるよう習慣化していく。</p> <p>書く活動では、日記活動を継続的にを行い、自分の考えや思いが表れるよう、理由を入れて書くことや構想表を用いて論理的な展開になることを指導する。要点を押さえた報告書になるようこまめに見ていく。また、作文ではメモを活用し、自分の体験や経験、社会的事象に即した考えを表せさせ、構想表を用いて論理的で具体性をもった考えを書くことができるよう指導を行う。</p>

(2) 社会科

社会科の重点

- ・問題解決的な流れで授業を行う。
- ・繰り返し復習して知識を定着させる。
- ・3年生で東西南北、地図指導などをしっかり行う。
- ・地球儀、地図帳を活用する。
- ・地域に出て人や物とふれあう体験をする。
- ・他学年の調べ学習の掲示物を見合い、参考にする。

現状分析 (成果と課題)	
分析内容	
3年	学区域探検を通して、学校のまわりの町の様子や特徴が少しずつつかめてきている。方角や主な通りの名称や周りの区などの位置関係がつかめない児童がいる。地図記号は、意味付けすることで興味をもち意欲的に覚えようとしていた。
4年	地域の人々の安全や健康を守る活動の学習は興味・関心をもって取り組んでいた。資料を読み取ったり、自分で調べたりすることも好きである。しかし、資料を正確に読み取ったり、調べたことをもとに考えたりすることには個人差が見られる。
5年	都学力調査の結果から考えると「思考・判断・表現」が都平均よりも下回っている。また、「解決する力」が都平均より7ポイントも低い。反対に「知識・理解」は、平均を上回り、知識の定着は見受けられる。

授業改善プラン	
指導上の課題	改善案
暗記が必要な学習内容も多く。児童が進んで調べようとする学習計画を立てていく時に個人差が出てしまう。校外学習を効果的に活用したいが、調査・見学して分かったことを意味付けしたりまとめたりすることに課題がある。	校外で学習する前の事前学習はもとより児童が調べに出かけたいという場の設定を意識しながら学習計画を立てていく。見学して「楽しかった」という学習にならないように、方角や地図記号と実際が結びつくように常に働きかける。資料等活用では「どうしてなんだろう」と意味や理由を考える活動を取り入れた授業を行う。
関心・意欲は全体的に高いものの、地域社会での体験や社会事象の知識に個人差が見られ、指導する上で課題となった。資料の読み取り方が分からない児童もいるので、具体的に指導していく。また、読み取ったことや調べたことをもとに考える力を育成していく。	問題解決的な学習を通して、自ら問題意識をもって、調べ、考え、表現できるような活動を設定し、学習意欲を高める。導入時の資料提示などを工夫し、児童が主体的に学習できるようにする。資料から読み取ったことを発表させ、根拠となる事象について多様な考えを発表させる場を設ける。また、ペアやグループ活動など話し合い活動を取り入れることで、体験や知識の個人差を埋めていく。
資料や身近な生活の事象をもとに、産業構造の在り方について、自分の予想をたてて、調べ、考える力の育成が必要である。特に、資料を読み取る力をつけていく必要がある。	学習内容に興味関心ももてるよう、教師側が身近な話題を取り上げたり、児童にニュースなどを集めさせたりして、社会事象や1次・2次・3次産業の様子を調べる学習に意欲的に取り組ませていく。そして、目的をもって調べ、考えさせる授業を行う。また、多くの児童が読み取り、その事象が発生した理由や根拠を考えられるような、資料作りを行っていく。

6年	<p>中野区学力調査の結果から目標値は上回っているものの、区や全国の平均正答率と比較するとやや低い結果となった。観察・資料活用の技能が70%を上回る結果となり、資料を活用する能力が高まっていることがわかる。しかし、社会的事象への関心・意欲・態度が62.5%と区平均を下回る結果となり日常生活でのニュースなどにより関心をもたせる工夫が必要であると考え。</p>	<p>新聞視写を通して社会的事象に興味をもてるよう取り組んでいる。しかし、ただ書き写している児童もいるので、なぜ問題になっているのか丁寧に説明をした上で今後は取り組ませていく。</p> <p>また、領域も地理から歴史と学習内容が違うので復習しづらいことも課題としてある。学習がやりっぱなしにならないよう学習内容を反復して復習する機会を設けていく必要がある。</p>	<p>学習内容に興味・関心をもてるよう、教師側が資料を精選しタブレットや大型テレビなどの視聴覚教材を効果的に提示し、児童が意欲的に考えられるようにする。</p> <p>また、調べ学習では、自ら課題を見つけ、追究しようとする授業を行う。学習感想に基づき、現在の事象と比較をさせることで学習課題にしていく。何が優れていてどんな原因や根拠があるのかをきちんと整理させていくことで、社会的事象への関心・意欲・態度を高めるとともに、論理的に思考する力を育てていく。</p>
----	---	--	---

### (3) 算数科

#### 算数科の重点

- ・意欲をもって学習に取り組めるような授業展開をする。
- ・具体物、図、数直線などを使って考えさせ、根拠を明らかにして説明する力がつく授業展開をする。・道具を使つての具体的な操作活動では、児童一人一人の実態に応じて丁寧に指導する。
- ・教材の提示の仕方を工夫する。
- ・思考過程が見えるノート指導をする。
- ・ドリル、プリントなどで反復練習を行い、基礎的・基本的な知識技能の習得を図る。
- ・量感を育てる。
- ・学年に応じて、少人数習熟度別学習を行う。個別指導を引き続き行う。

現状分析 (成果と課題)		授業改善プラン	
分析内容		指導上の課題	改善案
1年	<p>単純計算や具体物等を使った操作的活動には意欲的に取り組んでいる。しかし、数の構成がまだ理解できていない児童や、個別対応が必要な児童も各クラスで数名ずついる。能力差が徐々に出てき始めている。原因の一つとして、入学前までの生活経験の違いも関係していると考え。</p>	<p>板書をノートに書き写したり具体物を操作したりすることに個人差が見られる。また、学習の中で、個別対応を必要とする児童への指導時間の確保が難しい状況にある。</p>	<p>TTを活用したり、座席を配慮したりしながら、個別対応しやすい体制を整えていく。個別指導が必要な児童については、夏季休業中に補習を行い、操作する活動を重視した個別対応を行っていく。教材、教具の整備を計画的に進めていく。家庭と連携を図り、児童の課題を家庭学習等で補っていく。</p>

2年	<p>学力調査の平均正答率は、去年は区平均を約3%上回るが、今年は0.3%しか上回っていない。具体的には「3つの数のけいさん」が2.3%、「120までのかず」「ながさ」「かたち」が約1%、区平均より下回っている。また、「たし算」「ひき算」「とけい」は区平均を上回り、定着できていることが伺える。</p>	<p>くり上がりの足し算、くり下がりのひき算の計算になると、まだ指などを使って計算している児童が多い。また、数が増えたり、大きくなったりすると計算がわからなくなる児童も多く、繰り返し練習をする必要性を感じる。「ながさ」「かたち」「とけい」は授業時間だけでは定着しきれていない様子も見受けられる</p>	<p>毎日繰り返し、計算問題を解く。いろいろな問題に触れさせ、活用力も高めていく。また、具体的な場面をもとに考えさせるなど、色々なパターンの問題を取り扱う。家庭学習等も活用しながら、個々で問題に取り組む時間を確保し習熟を図る。  「ながさ」「かたち」「とけい」は、学習だけでなく日常生活でも、積極的に取り入れていき、習熟を図っていく。  休み時間や放課後等も活用しながら、個別指導を行っていく。</p>
3年	<p>学力調査の平均正答率は、区の平均を1パーセント上回るが、「活用」が区よりも0.8%低い。領域別だと、区の平均より「図形」が1.5%低い。また、観点別正答率で見ると、「数学的な考え方」が0.8%下回っている。具体的には、「計算の復習」「たし算・ひき算」「はこの形」で、区を下回っている。</p>	<p>平均正答率は上回っているもののたし算とひき算を含めた2年生までの計算の復習と図形について、基礎基本の定着を徹底する必要がある。基礎を確実にしつつ活用の力、数学的な考え方を伸ばすことが課題である。領域では、「図形」で道具を使っての具体的な操作活動を取り入れ、児童一人一人の実態に応じて丁寧に指導することが大切になる。</p>	<p>かけ算が苦手な児童に対して、個別にどの段ができないかの洗い出しを行った。2年生までの習熟に課題がある児童に対して、繰り返し唱えさせるなどして確実に習熟するように個別指導する。「活用の力」を伸ばすためには、具体物、図、数直線などを使って考えさせ、根拠を明らかにして説明することができるように指導する。また、既習事項を活用しながら、どのように新たな問題に向き合うか話し合いをすることで、解決する経験を積み重ねたい。</p>
4年	<p>学力調査の平均正答率は、区の平均とほぼ同じであるが、「活用」の平均正答率が区よりも5.8%低い。領域別で見ると、区の平均並みであるが、観点別に見ると、「数学的な考え方」が3.6%下回っている。具体的には、「時刻と時間」「数の相対的な見方」、記述で答える問題などにつまずきが見られる。</p>	<p>基礎はできているので、活用の力を伸ばすことが課題となる。しかし、授業の中では、基礎の内容をおさえることが中心となり、活用の時間まで取れないことが多い。課題の中に、基礎的な内容と活用力を伸ばす内容を取り入れるなど課題の工夫が必要である。また、活用する時間の確保については、一時間の授業の中だけではなく、単元全体の指導計画の中で位置づける必要もある。</p>	<p>数学的な考え方を伸ばすためにも、学習課題や提示の仕方の工夫、また、一人ひとりが思考する時間を確保することを行う。既習事項から自力解決、話し合いを通して、課題を解決させる授業を繰り返し行っていく。また、活用力を伸ばすためにも、課題の工夫、提示方法、発問の工夫が考えられる。また、単元の指導計画を見直し、基礎的な内容を学習した単元末あたりに活用する時間を設け、既習内容を活用する場面を多く取り入れていく。</p>

5年	<p>学力調査の平均正答率は、区の平均を3.7パーセント下回り、基礎は4パーセント、「活用」は2.3パーセント下回る。領域別だと数量関係の落ち込みが6.6パーセントと大きい。内容では、「がい数の表し方」「面積」「計算のきまり」が、平均正答率が低い。「群数」は、区を3.7パーセント全国を5.6パーセント上回っている。「角の大きさ」も、区を2.8パーセント、全国を4パーセント上回っている。</p>	<p>正答率度数分布は2つの山となっている。下位群のレベルアップが必要となる。領域では、「数量関係」の正答率を上げる必要がある。また、内容によって、正答率の個人差が大きい。内容による平均正答率の差が大きいのは、内容によって苦手意識や意欲に差が出ていると考えられる。操作活動や発表等の表現を増やし、身近な事象から考え、理解することで意欲につなげる。</p>	<p>少人数指導や放課後学習を効果的に行うことで下位群のレベルアップを図っていく。また、既習事項から自力解決、話し合いを通して、課題を解決させる授業を繰り返して行くことで「活用」の力とともに「数量関係」の力も上げる指導を行う。全体でのレベルアップのために、習熟度グループの力に応じた授業の進め方や、課題の与え方、発問の仕方について工夫を行う。また、教材の提示の仕方を工夫したり、操作的活動等を導入したりして、道筋をたてて考え、分かることで学習意欲を高め苦手意識をなくす。</p>
6年	<p>中野区学力調査の結果から全体的に観点別正答率が高く、特に数学的な考え方が区や全国平均値と比較して高い。授業では問題を解くだけでなく説明をしたり図に書き表したりと授業を工夫してきた成果が表れている。</p> <p>その一方、領域別正答率を見ると数と計算の項目が低い。ケアレスミスや分数と小数の理解が定着していないことが課題としてある。</p>	<p>学力の個人差が大きい部分が原因の第一に挙げられる。</p> <p>特に算数を苦手とする児童は苦手とする領域を苦手のまま学年が上がってきているところに問題がある。新しい内容を習得させようにも前学年までの積み上げが不足しているので時間が倍かかる。苦手とする領域も児童によってさまざなので、新たな学習内容の習得と既習事項の反復練習とのバランスを考えて指導することが課題である。</p>	<p>少人数指導や放課後学習を有効的に活用し、既習事項の確実な定着をめざして改善を図っていく。</p> <p>特に少人数指導では、児童の躓いている部分について学年間で共有を図りながら長期的な視点で補充指導を行う。また、授業ではこれまで通り考え方や説明など質を重視して行い、放課後学習では反復学習を中心とした量をこなしていくことなど、それぞれの役割を明確にして、算数を苦手とする児童の底上げや学力の向上を図っていく。</p>

#### (4) 理科

##### 理科の重点

- ・科学的思考力を育てるために、予想させた上で実験観察を行い、考察を行うようにする。
- ・授業アイディアの交換や教材教具の整備は継続して行う。
- ・日常生活の中で科学的分野の話題を意識して取り入れる。
- ・1、2年生の生活科で観察カードのかき方や観察の視点をしっかり押さえ、理科でも継続して行う。

現状分析（成果と課題）	
分析内容	
3年	初めて学習する教科に対しての関心や意欲は大変高い。実験や観察にも、興味をもって取り組んでいる。また、観察の際「色、形、大きさ」だけでなく「におい、感触」などの細かい視点を言葉で書かせるようにしているが、児童の個人差が大きい。
4年	様々な事象に目を向け、新たな学びに対し意欲的に学習に取り組んでいる児童が多い。一方で観察の観点をしっかりとらえ、観察することに苦手意識をもつ児童がいる。また、実験等で理解したことを、理科の用語を用いて正確に説明することについては個人差が大きい。
5年	都学力調査の結果から考えると「思考・判断・表現」「知識・理解」が都平均よりも10ポイントも下回っている。 また、「読み解く力に関する内容」も3観点全てで都平均を下回っている。 しかし、「技能」に関しては、平均を上回ることができている。
6年	興味・関心を持って学習している児童が多く、どの観点も区平均を上回っている。しかし、「技能」「知識・理解」は、全国平均より低い。中でも「天気の変化」「植物の発芽と成長」の領域では誤答が多く、日常生活で起きていることと学習が結びついていないことが予想される。

授業改善プラン	
指導上の課題	改善案
実験の内容を理解することに時間を要する児童がいるため、丁寧な指導を心がけている。実験や結果の予想は意欲的に取り組む。しかし、理由を考えたり、その結果からの考察を文章でまとめたりすることが苦手な児童がおり個別で声をかけている。	予備実験を工夫し、実験を伴う際の指導については十分な教材研究や教材準備を行い、簡単で明瞭な結果を導けるように工夫する。観察結果のまとめ方は、図解や絵などを用いて分かりやすく提示したり児童の記録を活用して紹介したりする。ICT機器を活用し、児童が視覚的にも理解が深まるように支援していく。
体験した事象を用語と結びつけて考えることができるようにする必要がある。具体物を使って実験・観察させることで、児童に興味をもたせることはできるが、知識の定着につながるかどうかは課題である。	実験・観察において、体験的に理解したことを知識や用語と結びつけられるよう、予想、計画、方法、結果、考察と順序立てて考えさせる。またノートの整理の仕方も順序に沿って指導することにより、単元の振り返りができるようにしたり、学習においても見通しをもって取り組めるようにしたりしていく。用語の意味が明確に理解できるように板書などでマーキングをする。
実際の経験と学習で得る知識とを結びつけて考えていくことが必要であると考え。仮説を立てる段階で湧き出た疑問を解決したり、調べる活動の中で発生した新たな疑問をじっくりと考察したりする手立てを多くすることが大切であると考える。	実験や観察において、その事象を、予想、仮説、方法、計画、結果、考察と順序立てて思考させるとともに絵や図解で補いながらも、言語表現に導けるように援助する。また、実験、観察の難しい内容は、視聴覚教材を効果的に使い、具体物を示しながら思考させるようにする。 より多くの実験・実践を通し、事象について根拠や理由にもとづいて活用できるような学習活動を展開する。
各単元では、専門的な用語が多く、内容も抽象的である。そのため、自分の知識として習得することが難しいと考えられる。自然科学に興味をもたせるための工夫が必要である。	なるべく身近なものや具体的なものを提示して、生活に生かされていることをもとに理解したり思考したりできるようにする。実験・観察は、予想、方法、結果、考察と順序立てて考えさせる。また、視聴覚教材を効果的に利用し、学習のまとめなどで積極的に活用する。



(5) 生活科

生活科の重点

- ・ 具体的な体験活動を多く取り入れ、気付きや考えを交流する場を大切にしていく。
- ・ 観察カードを継続的に行い、植物や生き物への関心を高めるとともに、観察の視点を押さえる。
- ・ 地域との交流を取り入れ、身近な人たちとかかわる楽しさを味わわせる。
- ・ 1・2年生間での交流を大切にし、1年生の時を振り返ったり、2年生への期待をもたせたりする活動を取り入れていく。

現状分析 (成果と課題)		授業改善プラン	
分析内容		指導上の課題	改善案
1年	身の回りの自然や身近な人たちに興味をもち、意欲的に学習に取り組む姿が見られる。生活体験の数に違いが見られ、不足している児童は発想や表現力が乏しい。活動している中でいろいろな事に気づくことはできても、それを文でまとめることは難しい。	観察や作る活動などの時間は確保できているが、ふりかえって十分にまとめられる時間がなかなかとれない。生活科室がないため、体験や作る作業などのときに活動を十分に確保したり、継続的に取り組ませたりすることが難しい。	体験だけで終わることのないように、ふりかえりの時間をしっかり取る。その際、視点を示して考えや気付きを書かせるようにする。また、児童間でカードや作品を見せ合い、多様な考えや気づきをもてるよう絵や図解を織りまぜながら言語での表現に至るように支援する。  狭い場所なりにやり方を工夫して、伸び伸び活動できるようにする。また、活動の場所を校外にするなど、地域との交流を図りながら活動させていく。
2年	身の回りの自然や生き物に興味をもち、進んで学習している。生活体験には個人差があるため、気付きや表現力には差が見られる。色々な事に気づくことができても、絵や文でまとめるのが苦手の児童も見られる。	児童を取り巻く環境で自然や生き物と触れ合う機会が少ない。したがって直接目で見たり、耳で聞いたりすること等の直接体験をする機会が少ない。児童の活動を充分に行わせたり継続的な取り組みをしたりしていくことが課題である。	自然や生き物に触れる環境は、学校だけでなく家庭とも連携して、様々な場面で触れる体験ができるようにする。特に、生活科「見つけたよ」カードを学校と家庭でやりとりし、衣服や気候など季節感を家庭でも話題にしてもらう。気付いたことをまとめる活動については、国語など他教科と関連させて繰り返し指導をしていく。体験活動などは、校外なども利用して行っていく。

(6) 音楽科

音楽科の重点

- ・ 豊かな感性をはぐくみ、音楽を通して自己表現ができる児童を育てる。
- ・ 音楽を聴きながら豊かに想像をふくらませ、味わうことのできる児童を育てる。
- ・ 音楽表現をするための、基礎的な技能を身につけさせる。

現状分析（成果と課題）	
分析内容	
1年	歌やリズム遊びに意欲的に取り組める。特に、手遊び歌やわらべ歌、体でリズムを取って歌う歌は、特に興味をもって楽しく歌っている。大きな声で元気よく歌える児童が多いが、恥ずかしがったり友達との関わり方がまだ不十分だったりする児童もいる。
2年	歌唱やリズム遊び、鍵盤ハーモニカの演奏に意欲的に取り組み、楽しく活動している。鍵盤ハーモニカの指導では基礎が身につけている児童が多い。鑑賞では、身体表現をしながら楽しく聴くことができる。
3年	歌唱では、発声の基礎を少しずつ身に付けている。音符リコーダーの演奏に意欲的に取り組んでいる児童が多い。
4年	歌唱では、周りを気にして消極的な児童もいる。リコーダーの演奏では、演奏できる音が増え、意欲的に取り組む児童が多い。
5年	歌唱では発声の基礎を身に付け、その技能を生かしながら意欲的に歌うことができる児童が多い。器楽では意欲的に取り組む児童が多い。

授業改善プラン	
指導上の課題	改善案
全体指導の中で動作をつけて歌ったり小節ごとに歌ったりしながら基本的な歌唱の仕方を身に付けていく。歌うことに消極的な児童にもグループでやペア活動で、自信をもたせるようにする。	全体での一斉指導のほか、グループでの活動を行い、個別に支援したり、教え合いの時間を取ったりするようにする。また、様々な活動の中で発表の場を設け、振り返りの時間をつくる。さらにペアやグループでの取り組みを導入し個別の見取りをしやすいと共に、みんなの前で表現することに躊躇する心情を解消させる。
表現活動への意欲を保ちながら、楽しく活動できるよう基礎基本の力を高めていく。鍵盤ハーモニカの指導では苦手意識のある児童を中心に底上げを図る。	グループやペアでの活動や発表の場を多く設ける。鍵盤ハーモニカの指導では、担任と連携を図り個別指導などを取り入れる。鑑賞ではくり返し聴き、気付いたことや感じたことを全体で共有する時間を設けていく。
歌唱では、まわりの声を聴き合わせる事が苦手な児童がいる。音符や記号、リコーダー指導では意欲を保ちながら、基礎を丁寧に指導していく。	歌唱では、レパートリーを増やし、歌うことの楽しさを味わい、ペアや小グループで歌う活動を行う。音符ビンゴに毎時間取り組み、階名唱や階名に慣れる。リコーダー指導では、担任との連携を図り全体指導と個別指導を行い、小さな曲に取り組んでいく。
歌唱では、それぞれの声を受け入れ、合わせることの心地よさを感じる。リコーダー指導ではタンギングの感覚をつかむ。	歌唱では、様々な楽曲にふれる。自分たちの歌唱を聞き合わせ、音の重なりを楽しさを味わわせる。リコーダーの指導を丁寧にを行い、グループ学習や個別指導の中で、タンギングを身に付け、音域を広げていく。
歌唱に対する意欲を維持する。声変わりなど高学年の壁を乗り越える。器楽では、苦手意識のある児童を中心に底上げを図る。	歌うことが好きな子どもたちの気持ちを大切に高学年の歌唱の技術を身に付けていく。 高学年としての発表の場を経験することで達成感を味わわせる。鑑賞では、気付いたことや感じたことを発表させ、学習を深めていく。

6年	歌唱では発声に気を付けて歌おうとしている児童が多い。演奏することに抵抗はないが、思いや意図を表現することが苦手の児童が多い。	自己を表現、互いに共感できる指導法の工夫を行う。鑑賞では、感じたことや気付いたことを言葉で伝えることが苦手な児童がいる。	歌唱や器楽の活動において、フレーズ感をもって演奏させる。歌詞の意味や、旋律の流れに注目させながら指導していく。鑑賞では、気付いたことや感じたことを発表し、互いに聞き合い交流し学習を深めていく。また、くり返し聴くことで曲のよさを感じる。
----	--	--	---

(7) 図画工作科

図画工作科の重点

- ・児童の豊かな感性を育て、表現する喜びを味わえる指導をする。
- ・自分の考えや思いを、材料や道具を工夫して使い、表現できる児童を育てる。
- ・かいたり、つくったり、表現するための基本的な技能を身につけさせる。
- ・より良い作品の完成を目指し努力する児童を育てる。
- ・自分で考え、自分で決めようとする姿勢を育てる。
- ・自分や他者の作品を大切にし、お互いの良さを認め合える児童を育てる。
- ・作品の鑑賞を通して、ものの見方や感じ方、豊かな想像力を育てる。

現状分析（成果と課題）		授業改善プラン	
分析内容		指導上の課題	改善案
1年	意欲的に取り組むことができる。用具の使い方個人差が見られ、進度の差が大きく出てしまう。	入学前までの生活体験に個人差があり、用具の使い方や創造力に差が出てしまうため、個別の指導の工夫を必要とする。	他教科とも関連させながら、様々な体験をさせていく。また、用具の使い方は丁寧に手順を示し、分かりやすく提示するほか、支援員の協力を得て個別の指導をする。
2年	用具や素材に対する経験は多くないものの、新しいことに対して興味を持ち、意欲的に取り組んでいる。	生活体験の差などから、用具の使い方、技能に差が出てしまうため、個別の指導の工夫を必要とする。	用具の使い方を丁寧に示したり、個別に声をかけたり支援員に協力を求めたりするなど、技能や進度のばらつきに対するフォローを行う。 新しい用具や素材に触れさせ、様々な体験をさせていく。
3年	意欲的に取り組んでいる。様々な体験を重ねる中で、ものの表し方や考え方が少しずつ身につけてきている。 人数が多いため、作業スペースの確保が難しい。	発想や技能の個人差が大きいため、活動内容や進度に差ができてしまうことがあり、個人への対応に追われてしまう。	用具の使い方を丁寧に示したり、個別に声をかけたりするなど、技能や進度のばらつきに対するフォローを行う。動線や場の設定を工夫する。 細かいところまで丁寧に仕上げることを細かく個別に指導する。

4年	昨年度課題だった児童同士の関わりや学級単位でのまとまりは、少しずつ改善されてきており、意欲的に取り組んでいる。	発想構想の能力や技能の個人差が大きいいため、活動内容や進度に差ができてしまうことがある。	用具の使い方を丁寧に示したり、個別に声をかけたりするなど、技能や進度のばらつきに対するフォローを行う。 児童同士で関わりを持てる題材や鑑賞活動などを取り入れて、お互いの作品やその違い、よさに目を向けさせていく。
5年	意欲が高く、豊かな発想力を活かし、自分たちで考えながら活動することができる。 昨年度課題だった技能面も、安全な用具の使い方が身につけてきている。	ひとりひとりの思いを表現するために必要な基本的な技能を定着させる必要がある。	用具の使い方をしっかりと示し、技能の定着を図る。アイデアを形にするためにはどうすればいいかを考えさせ、児童の発想を活かすことができるように構想メモを生かし、丁寧に指導を行う。
6年	基本的な技能は身につけている児童が多く、興味関心があることに対しては熱心に活動している。	面白いアイデアを膨らませるために考えたり、作品の完成度を高めるためにじっくりと取り組んだりすることが難しい。	様々な方法を試したり、つくり、つくりかえたりしながらじっくりと取り組めるような発問や準備、題材の選定をする。 構想メモを活用し、自分たちで考え、決めたことを生かして、つくる活動を更に進めたい。

(8) 家庭科

家庭科の重点

- ・家庭科に興味・関心をもてる児童を育てる。
- ・身の回りのことを自分で行える児童を育てる。
- ・衣食住などの基本的な技能を身につける。
- ・家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員としての態度を育てる。

現状分析 (成果と課題)	
分析内容	
5年	基礎的な知識及び技能がまだ身につけていない。特に裁縫(手縫い)は、手先の技能差が大きくみられる。 しかし、家庭科に対する意欲は高く、どの児童も意欲的に取り組んでいる。

授業改善プラン	
指導上の課題	改善案
家庭での毎日の手伝いや料理づくりなどの生活経験に大きく差があることが課題である。できる児童とできない児童が協力し合って学習に取り組む習慣はできている。	具体的な活動を通して実際の生活と関連づけながら学習していく。そこから基本的な技能が身につけていくよう支援する。特に「裁縫」と「調理」では、基本的な用具の使い方をしっかりと身につけさせていく。さらに、家庭での家庭科経験を増やすよう、家庭とも連携をとっていく。

6年	衣食住についての日常生活に必要な知識に大きく差がある。また、手伝いの経験にも個人差が大きく、教科書に書いてある内容と自分の生活とが結びついていない児童もいる。	知識として理解していることをどのように生活に生かしていくのが課題になる。実践的・体験的な活動を自分の生活に結び付けていくことが必要になる。	実生活を意識して活動に取り組めるようにする。「食事作り」や「生活の工夫」では、家庭生活への関心を高められるような体験活動を多く取り入れていく。また、家庭との連携を取り、協力を得られるようにする。
----	---	---	---

(9) 体育科

体育科の重点

- ・日常的に体を動かす機会を増やし、運動の楽しさを実感できるようにする。また、体育朝会を通し進んで運動する意欲を育てる。
- ・様々な運動に触れさせることで、それぞれの運動に必要な感覚や技能等を身に付けさせる。
- ・体力の向上を図るため、運動週間を効果的に設けることで鉄棒、持久走、縄跳びなど積極的に取り組ませる。

現状分析 (成果と課題)		授業改善プラン	
分析内容		指導上の課題	改善案
1年	休み時間は外で遊具やボールで遊ぶ児童が多い。どの運動にも楽しみながら取り組んでおり、体力テストの結果は、50m 走では東京都平均を上回っていた。しかし、男子はシャトルラン、女子は握力で大きく全国平均、東京都平均を下回る結果であった。	春の運動会、体力テスト、プールなど各単元の内容の運動に深く触れる機会は多かった。しかし体を使った様々な運動に取り組む機会は少なく、多様な動きを向上させることが難しかった。	様々な運動に触れさせ、多様な動きをする時間を多く設ける。個人差が大きいが、どの児童も楽しみながら運動できるような活動の場を工夫する。指導の際は、見本を示したり絵や図などを使ったりしてイメージをうまくつかませてから運動に取り組ませていく。日常的に運動に親しめるように休み時間等で声をかけていく。
2年	体を動かすことが好きな児童が多く、休み時間には外で元気に遊ぶ児童が多い。シャトルランと50m走は平均を上回っていた。反復横跳びは大きく全国平均、県平均を下回る結果となった。	前期は、運動会・体力テスト・水泳の授業が続いていたため、表現リズム遊びや水遊びの領域においては、高めていくことが出来た。一方、多様な動きを意識した運動や敏捷性、筋力を高める運動の時間は多く設けることができなかった。	敏捷性、筋力を高めていくために、体育の毎時間の始めにジグザグ走や号令による左右のステップや足の踏み換えなどを、リラックスさせながら短時間で集中してやらせたり、垂直跳びやケンケン足などの運動等を取り入れたりする。休み時間にも様々な運動に触れさせ、体の動かし方や運動の仕方を学ぶ機会を増やし、楽しみながら運動に親しむことができる環境をつかっていく。

3年	<p>外遊びが好きな児童が多いが、休み時間に外で遊びたがらない女子が数名いる。体力テストの結果は、50m走と20mシャトルランでやや全国平均を上回っていたが、ほとんどの項目で平均値を下回っている。</p>	<p>運動会前後には、体づくりの運動を意識的に多く取り入れてきたが、動物模倣などの動きでも苦手とする児童が多く、柔軟性や筋力といった面での指導を重点的に行う必要を感じた。</p>	<p>日常の外遊び、年間で計画されている運動旬間を活用し体を動かすことへの興味や関心を高めていく。個人差の大きい教科であるが、プレルボールやフラッグフットボールのように苦手な子どももゲームの中でチームの一員として達成感が味わえるような単元計画を立て指導に当たる。</p>
4年	<p>体を動かすことが好きな児童が多く、休み時間も外で積極的に体を動かす姿が見られる。50m走と長座体前屈に関しては、全国平均を上回る結果が出ている。しかし、20mシャトルランや立ち幅跳びは大幅に下回っており、特に持久力や筋パワーに課題がある。</p>	<p>運動会や体力テスト、水泳指導と続いたため、児童自身が自分の課題に対して、持久力を付けさせるための指導が十分に図れなかった。児童が楽しみながら主体的に体を動かし、持久力の向上につながる動きやゲームを指導していく必要がある。</p>	<p>持久力を付けるためには、縄跳びや持久走を取り入れ、継続的に指導を行う。筋パワーをつけるためには、ジャンプをするときやボールを投げるときなど一つ一つの動作に着目させ、児童が動きのポイントを意識して体力を高めさせる活動を取り入れていく。</p>
5年	<p>新体力テストの結果では「立ち幅跳び」「上体起こし」の数値が全国・都に比べ低い結果となった。筋力、瞬発力に欠けている。男子も女子も、「50m走」のポイントが平均を大きく上回っている。</p>	<p>夏休み前までは、運動会、体力テスト等、児童が自身の課題について追及していくことが難しい授業が続いた。そのため、児童が動きのポイントをつかむことが難しかった。</p>	<p>体育の授業では、個々に課題をもって取り組み、その成果がわかるよう学習の記録をつけて活動を行う。また、チーム競技も多く取り入れ、作戦やチーム内練習の時間を確保していくことで、運動の楽しさや試合の楽しさを気付かせられるようにする。</p> <p>さらに、跳び箱運動やマット運動などに力を入れていくことで、筋力や瞬発力を高めていきたい。</p>
6年	<p>体育に関しては意欲が高く、運動会や体力テストなどを見ても積極的に身体を動かしていた。</p> <p>しかし、児童の様子をみると球技運動に偏る傾向があり今後は多様な運動をバランスよく指導していく必要がある。</p>	<p>夏休み前までは、運動会、体力テスト等、児童が自身の課題について追及していくことが難しい授業が続いた。そのため、児童が動きのポイントをつかむことが上手くできなかった。</p> <p>また、委員会活動やアンサンブルなどが入っているため、休み時間に身体を動かす機会が減っていることも課題としてある。</p>	<p>球技運動や器械運動等、個々に課題をもって取り組み、学習の記録をこまめに付けることで課題克服の意識づけができるよう指導していく。</p> <p>また、チーム競技も多く取り入れ、作戦やチーム内練習の時間を確保していくことで、運動の楽しさや試合の運び方に気付かせられるようにする。</p> <p>さらに、小中連携を生かし、中学校の体育科の教員を招き授業を行う。先を見通すことで意欲を高める。</p>